

渡邊義浩編

## 『中国新出資料学の展開』

(第四回日中国者中国古代史論壇論文集)

汲古書院 二〇一三・八刊

B5 二二八頁 一二〇〇〇円

本書は二〇一二年五月二五日に開催された第四回日中国者中国古代史論壇「中国新出資料学の展開」に基づく論文集である。日中国者中国古代史論壇は、歴史・思想・文学といった学問の枠組みを超えた学際的試みとして東方学会と中国社会科学院歴史研究所の協定に基づいて二〇〇九年から毎年一回開催されている。第四回論壇では、近年、陸続と発見されている簡牘・帛書・文書・石刻などの出土資料がテーマに選ばれた。

本書は全体会・分科会Ⅰ(先秦)・分科会Ⅱ(秦漢)・分科会Ⅲ(魏晋南北朝～宋明)・総合討論の五部に分かれており、部ごとに研究報告のほか討論が付されている。題名に「中国新出資料学の展開」とあるように、ほとんどの論文が何らかの形で新出資料を取り上げている。全体で二人の報告論文と四人の報告要旨が掲載されており、このうち一〇本が中国語論文である。紙幅の関係で、一部の論文のみ内容を紹介する。

全体会には、主題報告二本(池田知久・卜憲群)と基調報告二本(谷中信一・陳偉)がおさめられている。池田氏・卜氏による主題報告は、日中の簡帛研究を網羅的に整理したものである。また、

谷中氏は「疑古」・「積古」の議論を整理し、新理論の必要性を唱えている。三氏の報告は、分科会Ⅰ・Ⅱの諸報告の内容と密接に関係している。

分科会Ⅰ(先秦)は、主に簡牘を用いた研究報告を五本(池澤優・湯浅邦弘・工藤元男・小寺敦・劉國勝)、要旨を二本(竹田健一・李成市)収録している。湯浅氏は、『銀雀山漢墓竹簡「貳」』所収「論政論兵之類」諸編を手掛かりに、その特質と古代兵学思想の展開を検討している。小寺氏は、伝世文献と清華大学簡『楚居』を用いて、「楚」概念の形成について論じている。

分科会Ⅱ(秦漢)には、秦漢の簡帛を用いた研究報告が七本(大西克也・藤田勝久・王彦輝・福田哲之・鄔文玲・名和敏光・王啓發)収録されている。大西氏は、楚・秦の簡牘を手掛かりに、用字法の統一と秦における文字改革に着目し、秦の文字統一の諸相を論じている。藤田氏は、里耶秦簡の内容を整理し、木牘にみえる文書伝達と情報処理について論じている。鄔氏は、二〇〇四年に安徽省天長市安樂鎮紀莊村で発見された私信の木牘を取り上げ、「椽遂致謝孟書」と命名したうえで、その内容を復元し、詳細な注解を付している。

分科会Ⅲ(魏晋南北朝～宋明)は、研究報告五本(町田隆吉・劉屹・陳峰・肖永明・阿風)、要旨二本(高凱・葉煒)を収録している。町田氏は、魏晋十六国時代の河西地域出土の漢語文献について基礎的な整理を行っている。劉氏は、ドイツのブランデンブルク学院所蔵の吐魯番文書(漢文・ソグド文)を取り上げ、漢文内容が道教の經典目録(『靈寶經目録』)であることを指摘する。なお、陳氏・肖

氏の論文は、新出資料を使用しておらず、本書のテーマとそぐわない印象をうけた。また、葉氏の要旨は、報告題名や討論の中で紹介されている内容と合致していない。

歴史・思想・文学のジャンルを問わず、新出資料を用いた研究（特に先秦・秦漢）を行う際には、本書が大いに参考になるものと思われる。

（会田大輔）